

在来種と外来種

「池の水全部抜きます」というテレビ番組があります。池の水を巨大ポンプで抜き、泥まみれになりながら、アカミミガメなどの外来種を捕獲排除し、昔ながらの生態系を取り戻す人気番組です。絶滅寸前の「か弱い在来種」対「悍猛な外来種」といった構図で、外来種を駆除する人達は正義の味方といった扱いです。

この番組を見ながら、日本列島に居住する私達は、果たして在来種なのか、それとも外来種なのかと考えてしまいます。太古、我々の祖先は大陸や南の島々からやって来たようですし、飛鳥時代や奈良時代には大量の渡来人が日本列島に定着しました。また、鎖国が始まる前、東南アジアや大陸との民族の往来は、想像以上に活発だったと思われるます。

こうしてみると我々現代人

の多くは外来人種の末裔そのものです。あえて日本列島の在来人種を挙げれば、アイヌの人々でしょうか。その在来人種を北方に追いやった、外来人種の末裔の私たちが、動物の世界を評して「外来生物は生態系を壊してけしからん」と憤るのもなんだか妙な話です。

島根県の外国人は既に8千人を超え、外国人労働者はますます増えていきます。これまでの工場、農林水産業、建設業、コンビニ、飲食店のみならず、これからは医療や介護の現場でも外国人の力が必要となってきました。今後私たちは彼らの介護で老後を送ることになるかもしれません。彼らと接する時、我々だって外国人の末裔だと思えば、彼らとの間のハードルは随分低くなるような気がするのです。